

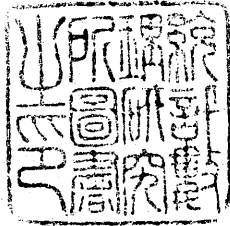
T 02
N 69
36

日本における統計学の発展

第 36 卷

話し手 伊 大 知 良 太 郎

聞き手 江 見 康 一



1982年5月11日(火)

統計研究会にて

1/9
25605

25605

ま え が き

1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)

2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

江見 本日は、日本統計学会の草創のころからの歴史を振り返りまして、この時期にいろいろお聞きしておかなければ、貴重な経験、エピソードなどが聞けなくなってしまうということ、統計学会の長老の先生方にお一人ずつヒヤリングをしておりました、ちょうど私が伊大知先生の担当を仰せつかったわけです。

まず最初に伊大知先生から、日本統計学会ができた当時の雰囲気、あるいは人脈、隠れたエピソード、そういったものがありましたら、ぼつぼつお話しただければと思います。

伊大知 ただいまの江見先生のお尋ねに基づきまして、でき上がったころの日本統計学会成立の事情を、ちょっとお話しします。

実は昭和5年（西暦1930年）、いわゆる国際統計学会（ISI）の総会が日本で開かれたんです。日本では会場を国会議事堂に求めまして、そのときに政府から正式にISIに呼ばれた日本人の先生方は、一橋でいうと藤本幸太郎先生、東大でいえば高野岩三郎先生、そういう結局おじいさん先生方だけが呼ばれたんです。

その当時、若手のちゃきちゃきで、オレこそいま日本の統計学をしょって立ちたいんだとかんばっていた人たちは、全然呼ばれなかった。その人たちは、人ぞ知る中山伊知郎先生、森田優三先生、有沢広巳先生、寺尾琢磨先生たちであられたと思うんです。その方々が、ISI何するものぞ、日本の国内で統計学会をひとつつくりゃないか。それでつくり上げたのが、日本統計学会だったわけです。

したがって、日本統計学会ができて上がったころの雰囲気というのは、中山先生、森田先生、有沢先生等の属しておられた学問分野の匂いがふんぷんとしているわけです。一言でいえば、要するに社会経済統計、社会経済畑の統計学者が集まってきまして、戦前から人数がだいぶ集まりました。したがって、研究内容も、ほとんど社会経済的な研究分野が多かったわけです。研究報告会の記録を見ましても、それが多いいんです。たとえば国民所得関係とか、そういった系統のものが非常に多い。

その当時、統計学会会報、会誌というんですか、報告書も、栗山書店でやってくれていたんです。非常に犠牲的な出版をしてくれまして、毎年年報を出していたわけです。その年報がノ冊ずつ統計学会の事務所に取ってあるはずなんです。それを見れば、その当時の研究内容がわかりますけれども、とにかくできて上がった雰囲気というのが、まさにISIに呼ばれなかった若手の人たちが、ふんまんやる方なくつくり上げたのが日本統計学会。ですから、ある意味でアンデパンダンなんです。しかし、別に正面からけんかしているわけでもないんで、日本の中でそれを機会に学会ができたということは、非常に喜ぶべきことだったわけです。

雰囲気としては、いまいったように社会統計、経済統計の分析が主ですけれども、その当時はまだまだ計量経済学的なものが動いてなかった。それが動き出したのは、戦前でもだいぶ遅くなってからです。例の1930年という年が、アメリカで計量経済学会というものができて上がった年なんです。したがって、そのころから、各国で計量経済学の動きができて始めたわけですから、日本で統計学

会ができたころは、まだその動きは入っていないわけです。

それがそろそろ計量経済学的な動きに移ってきたのは、結局各大学の若手の経済統計の先生方がたくさん参加して、その研究を始めた。それが日本統計学会の最初の生い立ちだったわけです。

そのころは、大体同じ傾向の人が各大学で集まりましたので、非常に緊密な提携ができて、内部的には何らの問題なしに発展していったわけです。その点、非常にやりよかったというか、気持ちよかったわけです。

その当時の統計学会の事務所は、どういうわけですか、総理府統計局の中の局長室、森田先生の部屋に置かれたんです。森田先生がずつと局長をやっておられたから、そういう変化もなかったんですけれども、事務所を統計局の中に置いていて、そこでいろいろな毎年の学会を開くための事務なんかをやっていたわけです。

江見　すでにそのときには、森田先生は統計局長だったわけですか。

伊大知　局長は16年間なされたんです。これは、その局長の終わりごろの時期です。学会ができたときには、局長をなさっていました。学会の会長は森田さんもやったし、これは年限がありますから、ほかの人々も次々にかわっていったわけです。けれども、事実上仕事をやっていたのは、森田さんです。森田さんのそばに續幸子さんという女性がノ人いまして、この人が秘書みたいな形でやっていて、外回りのお手伝いは私がやったんです。ですから、ある一時は、森田—伊大知体制というのができて上がったようなかっこうで、少しやり過ぎだとか、ほか

からだいぶうらまれたこともあったようです。けれども、そのために統計学会が順調に進んでいったんです。戦前の動きというのは、大体そういった匂いで進んでいったわけです。

江見 そのときに、いま東京の方々だけが中核になっておられたような感じなんですが、関西の方はいかがでしょうか。

伊大知 関西は、このころはもちろん水谷一雄さんとか家本秀太郎さんとかの神戸大学の先生方のほか、大阪大の先生、京都大学、関西学院大学の老先生方がほとんど参加しておられた。

江見 京都大学の蜷川先生なんかはまだ……。

伊大知 蜷川さんは会員じゃなかったんじゃないですか。あの人は、少し偏屈なんです。そういう学会には入らない。

江見 高木秀玄先生なんかはそのころは……。

伊大知 高木秀玄さんは入っています。それから関西学院大学の田村市郎さんなどは最初から入っておられた。同時に、自分のお弟子さんたちを盛んに入れまして、関西陣というのはかなり多かったわけです。

江見 そうすると、学会などは、いまのように関東と関西と交互にやりますでしょう。そのころからすでに……。

伊大知 それがあるために、関東だけでやっちゃいけない。箱根を境にして、関東、関西で1年置きにやろうということになったんですが、それをやっていると、実は関東側で少し不満が起きまして、関東だけで部会をつくらう。たとえば如水会館に少数だけ集まって、研究報告をやろうという関東部会というのをつくったんです。

三角、立体幾何となっていたわけでしょう。それが、太平洋戦争が始まる前ころから、もっと中学校の数学をレベルアップしなければいけない、微積分の初歩も入れなければいけないという機運になったわけ。やさしい微積分を中学校の数学に取り入れるというのが、日本の中学校の先生方の悲願だったんだ。

それで、どこから話したらいいかな。昭和6年はちょっと古過ぎるね。

鈴木 昭和15年くらいの……。

田島 昭和17年、その辺から行きましょう。昭和17年に要目改正というのがあって、

「昭和16年1月頃より文部省内にも中等学校数学教授要目調査委員会が設けられて、

掛谷 宗一、△木村 秋子、△黒田 成勝
佐藤良一郎、清水辰次郎、高木 貞治
△田中 良運、戸田 清、西山 毅

(△は起草委員)

の諸氏が省外の委員となり、昭和17年1月8～9日に要目案の議決をした。」(「日本数学教育会五十年史」)。

そのときに、数学の第一類、第二類ができたわけよ。

鈴木 「統計的処理」が入っているんですね。

田島 統計というのは、小学校の算術や算数にもともとあるわけ。統計は確率なんかよりずっと古いわけですよ。どういう意味の統計かは別として。

鈴木 「日常卑近ナル事項ニ就キ統計的ニ考察スル態度ト的確ナル処理ヲナス能カトヲ養フ」。

田島 主に、表にしてパーセントを円グラフにするとかなんとかという技術の方に走っちゃうんだけれども、一

応そういうことがあるわけでしょう。

それですつと来て、1年に「統計的处理」があって、第4学年に「箇教ノ处理」というのが出てくるわけよ。

鈴木 「順列」「組合せ」。

田島 「確率」「二項定理」。「有限個ノモノヲ分類処理スル能力ヲ養フ」というのが出てきて、「順列」「組合せ」「確率」「二項定理」、ちょっとおまけみたいに、この辺で初めて「確率」という言葉が出てくるんです。第5学年、旧制中学ですから5学年まである。

鈴木 いま、これがちょうど高校3年ぐらいの感じですね。

田島 第5学年にあって、第1類の最後に「統計図表ノ考察」というのがある。「度数分布」「平均ト偏差」「相関関係」「実験式」が出てくる。これが昭和17年の要目改正で、もう太平洋戦争が始まっているわけ。

鈴木 高等女学校というのも、内容がまた違うのですか。

田島 昔は中学は男女別で、こっちは少しやさしくしたようなものですよ。

鈴木 ここにも5学年に、「順列・組合せ・確率」入っていますね。

田島 これが昭和17年の改正で、それをどうしたんだろう。昭和18年の要目は同じものなんですよ。

鈴木 「教科書のない1年間」というのは、どういうことなのですか。

田島 戦争が激しくなって、こういう要目があっても……

鈴木 教科書が出版できないわけですか、紙がなくて。

田島 そうでしょう。「昭和17年3月に新しい要目は発表

伊大知 だから、数理統計だけの報告はなかったし、その研究者が特に会長になられた人は、戦前に数研の所長でお一人あったかな。それは記録を見ればわかります。ごくまれにそういう人がなったわけですが、大体は経済畑の人が会長になっていたし、メンバーのふえ方も、その会長さんが自分の声のかかるところへ、どんどんメンバーをふやしていったわけですね。したがって、そのころは、メンバーの質が圧倒的にソシオエコノミックだったわけですね。

江見 最初、つまり国際統計学会へ若手の方々がお招きを受けなかったといったようなことがバネになって、若手がのろしを上げたといった形だったんでしょうか、いずれ国際統計学会にある段階で加盟するわけですね。

伊大知 もちろん、そうですね。

江見 それは戦前ですか。

伊大知 いや、戦前はほとんどなかったと思います。ISIに関係した人は、森田さんとか2~3人なんです。ごくわずかです。

江見 それは、日本の統計学がISIのレベルにまだかなり隔たっていたのか……。

伊大知 レベルの問題は、ちょっと問題にならないと思います。日本だって相当進んでいたと思うんですが、問題は、日本の中で、ISIに参加することの意義を知らなかったわけですね。これに参加しなきゃ国際的にダメなんだろうということがわかってきたのが、最近なんですね。最近になると、森田先生はISIの副会長までなされたんです。そういう古いメンバーであったわけですが、それだけでなくして、われわれまで全部ISIに入ったわけ

です。その意義を、おかしい話ですが、たとえば文部省あたりが十分は知らなかった。ISIに入ることはどういうことか、文部省でも知らないくらい。一般の人はそんなことはどうでもいいと思っていた。ところが、やっぱり入っていると、いろいろ国際的な関係がよくなってくるわけです。という動きが、戦前から戦後への大きく切りかわった動きなんです。

そこで問題は、統計局にあった事務所を、思い切って数研に移したわけです。その前に細かくいえば、統計局の中で局長室から日本統計協会に一時移したんですが、結局、役所の中に置くということは、労働組合の方で問題になるんです。専従者でないのにそこへ特別な部屋をつくるとは何事か。統計局自身の労働組合に対して、専従者の部屋を与えなかったわけです。それなのに統計学会だけは専従者が部屋を取っているのはけしからぬという空気が起きまして、結局、局長室はもちろんのこと、統計協会にも置けなくなっちゃった。折りから数研の方で、ぜひ自分の方によこしてくれないかという意向があったので、思い切って渡したわけです。

江見 むしろ数研の方から……。

伊大知 そうです。要求が積極的にありましたし、われわれも大いに勧めたわけです。

江見 中の研究員は喜んでいられるかもしれないけれども、事務方の方でいろいろ国有財産の管理規則といった問題で……。

伊大知 それは、どこへ置いてもそうなんです。

江見 そして、ちゃんと部屋代を毎月払っているわけです。

伊大知 ところが、数研の規則を見ますと、毎年、日本統計学会で報告することという条文が入っているんです。あそこでは、そのくらい統計学会を尊重しているんです。自分の業務の内容にしているわけです。だから、当然あそこに置いていいと思うのです。また、移すところがほかにはなかなかないんです。

江見 一時、統計研究会へなんという話もありましたね。

伊大知 統計研究会と学会との関係というのは、ことに戦前の統計学会の体質が統計研究会の体質と非常に似ている、人もほとんど共通だったわけでしたが、戦後の統計学会の体質は、統計研究会とちよつと違ってきました。

江見 戦前から戦後への切りかえ、あらゆる分野でそこで一たん切れて、戦後、新生何とか会が生まれたということが、ほかの分野ではよくあるんですが、統計学会の場合、戦前と戦後の連続性はどうでしょうか。

伊大知 それはある時期に再開しようという申し出があって、集まったわけです。それで昭和21年、戦後になって新しく成立したのが、たしか二百何名かでした。そのときは、まだ数学陣はそう多くなかった。昔の会員を、再び募集したようなかっこうになったわけです。やはり大体経済メンバーが多かった。

江見 そのときは、まだ場所は統計局？

伊大知 そうです。

江見 先生が台湾から帰られて、横浜経専へ一たん入られて……。

伊大知 かたがた統計局のお手伝いをしていたわけですから、役所のお手伝いをすると同時に、学会のお手伝いもしたわけです。たとえば、ことは関西のどこの学校でやる。

その次は北海道のどこでやる。そういう会場を選定したり、決まった学校とのいろいろな交渉を、大体私がやったように記憶しています。

江見 そのころの苦勞話みたいなものはございますか。

伊大知 苦勞ばかりで、よくやったと思います。(笑) 結局、問題は会費というか、費用をどういうふうに払うかということなんです。最初のうちは、1つの大学で開く、そうすると直接その大学に経費として渡すのが、たしか5万ぐらいなんです。

江見 当時の貨幣価値で。

伊大知 それが毎年だんだんふえてきて、10万、20万になったのを覚えているんです。どんどんふえています。それはそれとして渡しておいて、それ以外に各大学で自分の負担でやるが大変なんです。だから、引き受け手がない。なかなかやってくれないんです。そこで、数年前から話をつけておく。ことし、ある学会をやりませぬ。そうすると、来年はどこでやるということも、ことしの会場である人をつかまえて、「君のところ、まだやっていないじゃないか」ということで、盛んに談じ込めわけです。それで2~3年前から話をつけておくと、どうやら先々かわかるんです。

ことし(昭和57年)は、千葉大学ですれ、千葉大学でやるときにどういう交渉をしておられるか知らぬけれども、来年は関西ですから、どこへ持っていくかという交渉をだれがやるのか。今では担当の理事が決まっているんでしよう。

江見 大会担当理事がいます。

伊大知 それが昔はなかったんで、ほとんど全部私がや

っていたようなものです。業務分担が何もなくて、結局森田さんと、續さんと、私と、3人で回っていたようなものです。

江見 ある程度家内工業的にやっていたわけですね。

伊大知 まあ、そうなんです。それがいろいろ問題の種類でもあったわけですね。絶えず突っ込まれていまして、おかしなじゃないかというようなことをいわれたこともあるんだけれども、これだけ一生懸命やっているんだから、目をつぶってくれということですね……。

江見 また、人数も少なかつたでしょう。

伊大知 いや、ふえたんです。初め200人で戦後再開して、それがたちまち倍になり、500、600、800なんてたちまちです。そうなりますと、いわゆるなあなあでは済まない連中がふえてくるわけです。そこで、何かと悶着も起きるんです。

そういうこともあって、要するにあまりよく心情の通じ合わない会員もできてきたということですね。昔は本当に会長が全部目を通せたわけですね。何か問題が起きても、まあ「なあなあ」で済んだんです。最近はそのはいかぬですよ。現在はもう千何名でしょう。

江見 もう1000名を超えました。

伊大知 これは大変だ。それから範囲としても、研究範囲がぐっと広がったわけですね。統計というものがどこまで伸びるかという見本みたいなものです。したがって、その中の経済ですから、非常に小さいわけですね。その上に、計量経済学会がどんどん進んでいますから、昔のように統計学会でなつかしい経済統計の研究報告なんか、めったに見られない。それを憤慨して、どんどんやめていく

経済畑の若い人もいるわけです。だから、その昔 I S I に反対してというか、向こうに回して日本でも学会をつくらうといった若手の人たちと、最近、いまのような傾向を嘆いてやめていく人と、同じ若手なんだけれども、時代がそれだけ違うんだ。昔の若手というのは、本当に統計学会をこういう形に持ってきた、本当の中心的な存在が5~6人あったわけですから。関西を含めれば十何人の人が、本当に統計学会の柱になったわけです。

江見 統計学人口も少なかったでしょうし、そういう方々は先駆的な気負いといったものもございましたでしょう。いまは統計学人口もふえましたし、いわゆる統計学の意味づけが、いろんな学問分野の横の紐帯というか、それを全部締めくくる共通項みたいな形で、統計学とその応用が受け取られておりますから、広くなったけれども、何か専門的な集約が弱くなったというようなことが感じられますね。

伊大知 そうですね。そういう大きな流れがひしひしと感ぜられるんですが、今日までその同じ傾向の勢いが、ぐんぐんふえる一方ですね。はっきり要因をいいますと、計量経済学会の発達が他方にあって、統計学会の数理人口が依然としてどんどんふえている。その2つの要因から、今日の統計学会の性格ははっきりと読めるわけです。そこへ持ってきて、事務所が数研だということが、一層そうした傾向を明確にしているわけです。人数があれだけ数学的になってきますと、やはり数研がやるべきだと思います。

江見 ただ、人数からいえば、1000名の中で、やはり経済関係の方が、依然としてかなり多いわけですね。

伊大知 そんなにいますか。

江見 ウエートは低くなりましたけれども、やはり無視できない。

伊大知 無視はできないかもしれませんね。結局、ちっともふえていないんですよ。毎年増加の内容を見ると、数学障ばかりですから。

江見 だから、大きく分けて経済関係と数理関係と、人口、衛生、医学。

伊大知 社会関係とといいますか、それがずっとふえているわけです。経営関係がふえています。ですから、いわゆる経済プロパーというものが、だんだん狭くなっていることは確かですね。ウエートが小さくなっている。

江見 だから、いわゆる経済関係だけが統計学会から独立して、経済統計学会というものをつくらうではないかといったようなことを、ちょっと思っている方もいらっしゃるんじゃないかと思えますけれども。

伊大知 機運はあったわけです。私が会長をやっているときに、よほどその提案をしようかと思ったぐらいなんです。けれども、まだ時期が早い。やっぱり柿が実って本当に熟し切れれば、ポタリと落ちる。その時期を待とうというのが、私の意見だったんです。無理に実を引きちぎると、かえってけんかのもとになる。したかつて、熟柿がポタッと落ちるまで待とうということだったんです。確かに動きはあるんです。

ただ、現在、部会をつくっても、独立した学会をつくっても、計量経済学会との統合が問題になるわけです。

江見 つまり統計学会の枠の中でも満たされない、そうかといって、計量経済学会に入っても満たされないとい

う分野があるんですね。別にコンピュータを使わなくても、そろばんをはじいたり、普通の電卓でできる範囲内で、やはりヒストリカルな統計と経済との結びつきを考えようということに、関心のあるグループもいらっしゃいますから。

伊大知 そうなんです。いろんな傾向がありまして、それをいいますと、実は数学者自身がそうなんです。数学会で報告した方がいいような研究も統計学会でやっているんです。数学会へ持っていくと、どうも評判がよくないというのがあって、統計学会というものの必要性を、数学者自身が再認識しているんです。

江見 私自身は、統計学会は本来、学際的な学会の典型だと思っています。

伊大知 それは、統計学というものがそうなんです。

江見 だから、むしろいろんな方々が統計学という共通の紐帯で結ばれることによって、他の分野の方々の研究内容とか、いまどういうことをやっておられるのかという情報を交換する場として考えれば、また新たな統計学会の意味づけというものが出てくるんじゃないか。

伊大知 だと思えます。おっしゃるとおりだ。というのは、統計学そのものの性格も、戦前こういうことが始まったときとだいぶ違うんです。だから、学問の性質自身が、おのずからそういう特徴を必要とするのかもしれない。

江見 だから、数理関係の方は、どちらかというとなら方法論の開拓、開発でございましょうし、われわれ経済畑の方はそれをどういうふうに関心の社会に応用するかという応用編でございまして、どうしても両方が車の両輪

で、お互いに切磋琢磨しながら、大きく統計学とその応用という形でまとまっていく。

伊大知 そうだと思います。事実そうなんだけれども、数学陣が数が多くなってきたのと、その数学陣の報告を一般の経済陣の方が聞かないんですよ。

江見 また、聞いてもわからない。

伊大知 そこが問題なんだ。

江見 だから、お互いに分科会があっても、行くところは決まっているわけですね。一つ一つの分科会が結局三三統計学会になっちゃっているわけですね。

伊大知 統計学会の運営はむずかしいんですよ。

江見 今後の運営はむずかしいですね。運営の仕方によっちゃうまくいくんだが、いまのままだと分割されたままで、お互いに隣は何をする人ぞという感じで、それが緩やかな連帯でくくられておる。

その社会経済的な側面についての応用という点で、最初のころはたとえば国民所得とか、そういう経済関係のものにかなり関心が向けられたということでしたけれども、やはり時代によって、そういうテーマの重点は移ってきているんでしょうね。

伊大知 それは変わります。

江見 戦時中に、たとえば国家総動員なんてことがいわれたときに、森田先生、米沢治文先生の国民貯蓄の推計とか、ああいうものがぼくは記憶に残っているんです。

伊大知 やはり、国民所得の研究ということで大きくくくれるんです。国民所得そのものの研究の仕方が、だいぶ変わってきていることでしょう。ことに最近の新SNAまで行きますと、だいぶ違ってくるので。

江見 私も一橋大学、先生も一橋大学の名誉教授でいらっしやるわけですが、統計学会と一橋大学とのかかわりというのは、当初、中山先生などが若手のころに、旗上げをされたということで、かなり統計学会にコミットしているというのか、非常に密接な関係で来ていると思うんです。第一、会長になられたのが、中山先生、森田先生、伊大知先生、山田先生。ほかにはいらっしゃいますか。4人。

伊大知 いるかもしれませんが、ちょっと思いつかない。

江見 だから、初期のころ、戦前から戦後にかけて、統計学会のかなりの期間、そういうふうにして密接に関係を持っておったわけですがけれども、私どもの代になりまして、何となく疎遠になってきたような感じがしまして、非常に残念だし、また責任を感じておるわけです。これは、統計学会の性格の変貌ともある程度関連がありますね。

伊大知 ですから、このころは、私はあまり気にしないことにしているんです。自然の成り行きとして、そうなるんじゃないかと思うんです。

江見 だから、その成り行きに任せるのがいいのか、この辺で緊禪一番、ソシオエコノミックな側面を強調するようなムードを盛り上げていくのがいいのか……。

伊大知 それは、やっぱり研究テーマを整理して、幾つか並行してやるべきじゃないかな。部会をつくると、またけんかのもとになるんですよ。だから、研究テーマで集めていかないと。

運営の問題では、骨を折りましたよ。

江見 終戦直後の話ですか。それとも……。

伊大知 終戦直後が一番苦勞しましたね。結局、外の根回しの問題が大変だったんです。それをやったことがない人は、だれも認めてくれないんだ。文句ばかりいっているんですね。

江見 黒子役に徹しておられたから、外の人にはよくわからない。とって、外に吹聴するというほどのあれでもないというようなことで、結局犠牲的精神で……。

伊大知 それでぼく、おこられたことがあるんです。妙な言い方をされて、「おまえ、総会屋みたいなことをやるな」と、おこられたことがある。ところが、考えてみると、そういうことを発言した人が、実は総会屋なんですね。

江見 しかし、学会の運営なんというものは、だれかがやるだろうと思ってみんなが高みの見物をしておったんでは動かない。やっぱりだれかがやらなくちゃいけない。そういういわば貴重な存在というか、犠牲的精神をお持ちの方が何人かいらっしゃいませんとね。

伊大知 いま私が一番印象的に考えていますのは、森田先生の努力ですね。これが一番大きいです。もしあの先生が、あれだけの努力をあそこでしなかったら、いまの形も残らなかつたんじゃないかと思う。

江見 あの先生は、統計学に始まって統計学に終わるといふか、統計学に殉じるといふか、終始一貫して日本統計学会、あるいは統計学の発展のために、ご尽力なされたわけですね。

伊大知 「統計学と私」という本を出されたでしょう。

江見 それから「統計遍歴私記」の中に、かなりいろんな詳しいことを書かれておりますから。あの中に書かれ

ていること以外で、森田先生はお気づきになっていないようなことで、伊大知先生がお気づきになっておられることがあれば……。

伊大知 やっぱりほとんど2人一緒に動いていましたから、私だけ知っていることもないと思う。

江見 ぼくは、昭和20年代の終わりから30年代の初めに統計学会に入れていただいたんですが、昔は学会が遠隔地で、しかもあまり行ったことのないような町で、たとえば高松とか、そういうところであつたものですから、学会に参加することもさることながら、その町へ行って、いろんな見聞を広めるといったような楽しみが、もう1つありましたね。

伊大知 それを大いに利用したんです。たとえば、「来年は金沢でやりますよ。北陸路を散歩することもいいじゃないですか」、幹事をやっていたながら、そういう勧誘をしたわけですね。それでおこられたんだ、あんまりやり過ぎだと。

江見 しかし、統計学会はわりとつましい学会ですね。どんちゃん騒ぎしないし。

伊大知 カネがないからね。

江見 エンターテインメントといったって、知れたものですし。

伊大知 私は個人的な集まりでしたけれども、学会のあるたびごとに、学会のある町へ行きますと、そこに専売公社が支局を持っているんです。その支局の連中が私たちを呼んでくれて、私の部会に入っていた連中、一橋や慶応の連中が多かつたんですけれども、7~8人一緒になって、専売公社のいろんな催しに参加したことを

覚えています。北海道でも、四国の高松でもそうでした。いろいろ特別な経験をしまして、おもしろかった。自分にもだいぶ利益があったんです。

江見 いまでも統計学会の名簿を見ますと、一橋大学と並んで、慶応大学が多いですね。あれはどういう関係……。

伊大知 中山先生、森田先生たちとご一緒に、発案者のノ人に寺尾先生が入っておられるからでしょう。

江見 寺尾先生は、最初の旗上げのときに参加しておられた。

伊大知 そして研究内容が、一橋と慶応とは非常に似ていたんです。東大とはあんまり並行していなかったせい、か、手を握らなかつた。

江見 この統計研究会も、一橋と慶応が多いでしょう。人脈という面でも、やっぱり多少関係あるのかもしれない。

伊大知 発生当時の統計学会の流れから来ているわけです。

江見 統計研究会も、一橋と慶応でもっているようなものですね。そんなこといつちゃしかられるかもしれないが。

中村 (統計研究会総務部長) そんな感じですね。

伊大知 事実そうでしょうね。

江見 そういう草創のころの諸先輩の中で、すでにお世くになりになった方もいらっしゃるから、かなり……。

伊大知 統計研究会の20周年だったか、30周年だったか、そういうことの思い出をやった会がありましたね。

中村 20周年の座談会がありました。

江見 あれは、統計学会を含めないで、統計協会だけの。しかし、メンバーはかなりダブっているかもしれませんね。

伊大知 だいぶダブっているでしょう。

江見 そういう記録も利用していいんだな。私ども、いただいておりますから。

最初の統計学会のころ、入会は必ずかしかったんですか。

伊大知 やはり推薦です。いまと同じ、会員2名の推薦。

江見 昔はよく新入会員は、壇上に出て氏名を名乗って……といったようなことが、あれは統計学会じゃないかな。

伊大知 それは、新会員が最初に報告のときに、なるだけ報告をするように勧めたことはあります。だけど、新会員だからといって、あいさつしたことはない。総会的时候に、「今度はこの方が新会員になりました」と紹介はします。そのときに、自己宣伝をやる人もありましたが。

江見 昔の方が、入会ということがずっと厳しかったような感じがしますね。

伊大知 結局、推薦が厳しかったんですよ。

江見 いまは機械的にというか……。

伊大知 会員の候補を送ってくるでしょう。返事がなければ入会するんだということですね、評議員の反対がなければ。

江見 こちらは学会に入りたいと思っても、「まだ君は早い」なんてことで、なかなか推薦してもらえなかった。

いまはそんなこと全然ない。

伊大知 だれでも入れます。

江見 おしろ、多々ますます弁ずで、会員というのは会費を出してくれるお客様だ。(笑)

伊大知 そういう点では、だいぶ墮落しましたね。

江見 いわゆる学会の純度が低くなった。

伊大知 ほかの外国の学会と比べて、落ちるんではないかという気はしますね。中でやっている研究そのものは決して負けないけれども。

江見 玉石混淆という面がございまして、学会に名を連ねている、会員名簿に名前を記載してもらおうということで、学会に一種のヘッジをしているという感じなんです。

伊大知 いまでも、たとえばISIのメンバーですということは、リッパな履歴になるんです。統計学会の会員ですといっても、いまあまり履歴にならない。役員は別だけれども。

中村 いまISIのメンバーは、何人ぐらいいるんですか。

伊大知 メンバーのリストも、毎年向こうから送ってきます。篠原さんも入っているはずだから、統計研究会へも来ているんじゃないかな。

ISIも最近はおちぶれまして、会費が足りないから、各国でメンバーをふやしてくれという要求があるんです。

江見 おしろなかなか入れてもらえないという方が、権威があって……。

伊大知 あれは、推薦がむずかしいんです。すでに会員になっている日本人が2人、外国人3人の推薦がないと、入れない。その推薦があって、選挙の候補者になるわけですね。その次の選挙のときに通ると、入りましたとい

うことです。

私が入れてもらったのは戦後ですけれども、外国人の方の推薦者を探すのに骨を折りました。日本人は幾らもあるんだけれども。結局、ロンドンの統計局長とか、オランダの統計局長、もう一人アメリカの人、三人ほどやっと見つけて、それは個人的に手紙のやりとりをしていました。そうしたらオーケーになりました、すっと通ったんです。

江見 それでは、きょうはこの辺で締めくくりとしたいと思います。

伊大知 あまり思い出せなくて済みません。

江見 どうもありがとうございました。